

---

# 欠けたままの月

委員長

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

欠けたままの月

### 【Nコード】

N7076X

### 【作者名】

委員長

### 【あらすじ】

異形の住む山の近くの村に生まれた青年の成長ストーリー。

## プロローグ 村を守る剣（前書き）

筆者の初めての作品となります。物語の青年と共に成長していきたいと思っています。誤字脱字もあると思います。感想、アドバイスなどありましたら是非お願いします。

## プロローグ 村を守る剣

ガキンッ！

髪の白くなりその顔に皺のある老人と若々しい青年が剣を打ち合う。

岩から削りだされたような無骨な刀身を持つ大剣を構える青年に対し、老人が構えている剣は薄く伸ばされた鉄を刀身に持っている。普通なら打ち合いを避けるべきであるのだが、老人はそれに付き合っている。

なのにもかかわらず、老人の剣が欠けたりすることはない。老人は勢いの乗った青年の剣と打ち合っているのだが、体勢を崩すこともない。

これは彼らの間に大きな力量の差があることを示していた。

「どうした？今日も何も出来ずに打ち合いが終わってしまっぞ」

「うるさい。老いぼれ。今に、見てろよ」

老人にはまだ余裕が感じられるが、青年の方は息も絶え絶えである。定められた時間や青年の体力的にも次の打ち合いが最後になるだろう。

青年は緩慢な動作で大剣を振り上げ、そのまま斜めに切りかかった。が、次の瞬間には剣は手から離れ、後頭部に衝撃が走っていた。

「今日はここで終わりじゃ。もっと精進せんと村は守れん」

青年は薄れる意識の中で、老人の声と剣を鞘に収める音を最後に聞いた。

青年は物心ついた頃から既に修練を受けていた。青年の生まれた村を守る剣として育てられていたのだ。父親は、既にその役目の真つ只中であつたため、修練を担当するのは専ら祖父の役目であつた。太陽の昇る方にある山には、異形が住んでいる。村を守る剣は、代々受け継がれ、その山の異形から村を守る役目を負っていた。青年はその一族の末裔であり、修練を欠かすことはできない立場にある。

青年が目を覚ますと、見慣れた藁の天井がある。身体を起こすと後頭部に鈍い痛みが走る。どうやら気絶させられてからあまり時間はたっていないみたいだ。

「もう起きたの。まだ治癒をしていないのだけど」

声のするほうに青年が顔を向けると、金髪の少女が横であきれた顔をしていた。

「サヤの治癒は荒っぽいから遠慮しとくよ」

「そんなこと言わないで、練習に付き……じゃなくて治癒を受けなさいよ」

サヤ、と呼ばれた少女は青年を捕まえようとしますが、青年は、それをスルリとかわして外に出て行った。

「ケン！ちょっと待ちなさいよー！」

「ちよつと村の周りを走つてくるだけだからー！」

そう言つて、止まる気配を見せないケンを追うのを諦めたサヤは家の中に入つていった。

剣には鞘が存在するように、村を守る剣にも「鞘」がある。いかに修練を重ねた「剣」でも、傷を負うことがある。その傷を「鞘」が素早く癒すことで少数で村を守ることを可能にしているのだ。

「鞘」は、代々受け継がれる村を守る剣とは違い、水の下級精霊である「治癒の精霊」と契約できた者が選ばれる。水の下級精霊である「治癒の精霊」は無数に存在し、その数だけ契約する方法がある。運良く精霊と契約できた人は、村を守る剣の「鞘」になる。

そして一対となった「剣」と「鞘」は本来の名前を呼ばず、お互いをケン、サヤ、と呼び合う。そうやって、信頼を深めていき、村を守っていくのだ。

既にこの村には四組の剣と鞘がある。青年と青年の父親と叔父、そして青年の弟である。叔父に子供はおらず、しかもまだ青年とその弟は実戦には参加できないので今のところは父親と叔父が交代制で村を守っている。そのうち、青年と弟が成長すれば全員が戦えるため一人当たりの負担が減るのであるが、青年の様子を見る限りまだまだ先の話になるだろう。

## 1話 剣と弟

青年は今日、朝早くから祖父に呼ばれ、修練場に行くことになった。今日は祖父が定めた手合わせの修練の日の日ようだ。

三十日周期でやってくるその日は、青年にとっては憂鬱な日であった。

「今日こそは勝ちなさいよ。いつまでも弟に負けてちゃ格好悪いんだから。」

「わ、わかってるよ……。」

手合わせの修練は、祖父が考え出したものでその内容はいたって簡単である。青年とその弟で、実戦のように戦うだけだ。その時使う武器も、修練用の武器など存在せず実戦で使うものを使用する。

致命傷となりそうな攻撃が放たれた場合、祖父がその場で止めるつもりの日ようだ。

まだ、そんなことになったことは一度もなかったが。

ケンとサヤが修練場に向かうと、既にそこに一組の剣と鞘がいた。青年によく似た顔をしたまだ幼さを残す少年と、青年より一回り程大きな男が立っている。

「おはようございます。ウォルト兄さん、ノアさん。」

少年がその青い髪を揺らしつつ、頭を下げて挨拶する。ノアさん、と呼ばれた金髪の少女は少年に微笑みつつ答えた。

「おはよう、グレイツくん。バルドーさん。」

「ああ。」

それに続いて青年が無愛想な返事を返す。どうやら手合わせに向けて集中しているというわけではなく、ただ単に少年のことが気に入っていないだけのようだった。しばらくした後、少年の横にいたバルドーさん、と呼ばれた男が反応した。

「お、やつときたのか！元気がお前ら！」

「はい。バルドーさんも元気そうですね！」

「ああ。」

元気よく反応した男に元気よく返事を返すノアに比べて、ウォルトはまたしても反応が薄い。

グレイツの鞘であるバルドーに対しても対応は同じのようだ。ウォルトを除く三人が歓談していると、白髪の老人がこちらに歩いてくる。

「あ、おはようございます。リフ様。」

「おはよう。リフさん。」

「おはようリフ爺。今日も元気そうだな。」

「よお、じいじい。」

それぞれに違う反応をして、四人はリフの言葉を待つ。リフは一人

ずつ眺めた後、口を開いた。

「揃っているようだな。これより、手合わせの修練を始める。」

リフがそう言い終わると、ウォルトとグレイツがそれぞれ武器を手にとった。

ウォルトの手には、いつもリフとの修練で使う自分の身の丈程もある大きな刀身の剣が、グレイツの手には刀身の短い剣が二本握られている。ノアとバルドーはリフの隣に座って観戦する体勢をとっている。リフは大きく息を吸うと、

「始める！」

と、声を上げた。

ウォルトが剣を構えているとグレイツは既にウォルトに向かって走り出しており、距離を詰めていた。

刀身の短い剣がウォルトに向かって走る。これから振り出せば間に合わない、と判断したウォルトは打ち合うことはせず後ろに跳んでなんとか避ける。そして、そのまま大剣を横薙ぎに振り払った。

その一撃にグレイツはたまらず後ろに下がる。ギリギリでその一撃を避けたかと思うと、次の瞬間グレイツは振り切った隙を狙い全力で距離を詰めていた。ウォルトの右腕に切り傷が入る。続け様に振られたもう一振りの短剣がウォルトを襲う。さらにもう一筋右腕に傷が入った。

「ち……。」

「止め！あと九回やるぞ！」

リフが一旦手合わせの修練を止めた。ウォルトの右腕からはポタ

ポタ、と少しずつ血が滴っている。

一回目はグレイツに有利な状態で終わった。大剣を使うウォルトは隙が大きく、その瞬間に攻撃されるととても不利になる、ということをよく知った上でのグレイツの猛攻であった。

ウォルトの一撃の間合いをよく知っているグレイツにとって、当たるか当たらないか、というギリギリで避けることも容易だったようだ。

ウォルトとグレイツの二人は、お互いの鞘の元へ歩いていくとドサツ、と音を立てて地面に座った。

「治癒に五分ほど下さい。」

ノアはそうリフに言うと、目を瞑ってウォルトに向かって頭を下げるような体勢をとった。

そして、片方の手を傷にかざす。そのままの状態で三分程経っただろうか。ノアの手ひらが徐々に青い輝きを放ち始めた。すると、じわじわ、と血の出ていた傷口が青い輝きの強さに応じてだんだんと塞がっていった。

「ありがとう、サヤ」

「今はノアでしょ？それよりどう？治癒のスピード速くなったでしょ？」

言われてみると確かに早くなったな、とウォルトは答えた。

しかし、その右腕には血はついたままである。ウォルトは、リフに川に行ってくる、と言うとすぐ近くにある川に向かっていた。

## 2話 剣と叔父

ウォルトが川に着くと、その近くにいた長い尾を持つ鳥が空に羽ばたいていった。

この川は山から流れてきているが、異形の影響などは受けていないらしく、飲み水などとして使われている。下流には田畑が広がっている。川岸まで辿り着くと、川の中に右腕をつける。

ウォルトは腕の掃除を川の水流にまかせて先程の手合わせの修練の反省を始めた。

接近を許さないように立ち回るか、どうにかして剣の打ち合いに持ち込めばこちらにも分はある、と考える。だがしかしそれが難しいことだということも分かっている。どうすれば勝てるのだろうか……。

ふと、武器を変える、という考えが浮かんだが、すぐにその考えを捨てた。

今さら武器を変えたところで、さらに実力に差が出るだけでいい案だとは思わなかった。

それに、あの日の叔父の剣技を思い出せばこの大剣以外使う気にはなれなかった。

とても昔のこと、しかしウォルトは今でも鮮明に思い出せる。

その日はじとじと、と雨が降っていて昼だというのにまるで夜のようだった。

ウォルトはまだ幼く、短剣を使って修練をしていた。その短剣を背負って村の周りを走る修練をしていたのだが、一番山に近付いている地点でその声に気づいた。

声の主が「何」かは分からなかったが、およそ人間が出せるような声ではなかった。獣の類かと思ったウォルトはその声を無視しよう

としたが、初めて聞くその声への好奇心に打ち勝てずその声のする方へ向かっていった。

近付いていくにつれだんだんと大きくなるその声と共に、金属が何か硬い物とぶつかりあう音も聞こえる。木から木へと移りつつその地点に近付いて顔だけを出した。そこに広がる光景に、ウォルトは声を出すことも目を逸らすこともできなくなった。

そこには大きな剣を持つ叔父と異形がいた。異形には、筋肉のような盛り上がりのある褐色の足が四本、ずんぐりとした胴体と思わしき部分から生えていた。前足には石のようなものが一定間隔で埋め込まれていて、胴体に近付くにつれその間隔は狭くなっていた。後ろ足の後ろ側には燃えるような赤色の毛があり、ゆらゆら、と揺れていた。

ウォルトが胴体から上を見ようとしたときには、異形はもうその場所にはいなかった。

その代わりに、何か硬い物が砕け散る音とずしゃっ、という肉が引きちぎられるような音が聞こえた。

次の瞬間、ウォルトの目の前に見覚えのある物体が飛んできた。それは、一定間隔で石のようなものが埋め込まれている先程見た異形の前足だった。

ウォルトは、血のような液体を噴き出しながらびくびく、と痙攣している足を見て、

「ぎゃあああああ。」

と、悲鳴を上げてしまった。次の瞬間、目の前にきらり、と光る物体と大剣がありウォルトは腰を抜かした。さつきからずっと聞こえていた異形の声を一番近くで聞くことができた瞬間であった。

異形のずんぐりとした胴体から、よく見かけるようなカマキリの上

半身が生えており、カマキリの象徴であるカマが上半身から二本生えていた。目の前で光っているのはそのカマだった。

さらに顔には赤く大きな目が三つあり、爛々としていた。鋭利な輝きを放つカマと、叔父の大剣がギリギリ、と音を立てている。叔父はそのまま大剣を押し切つて、異形の体勢を崩すことに成功する。

前足の無くなった分、上手く力が出せないようだ。そのまま切りかかる大剣に異形は片方のカマを合わせようとするが、ぶちっ、という嫌な音と共に異形のカマは遠くに飛んでいった。

そのまま、異形は大剣の一撃を受ける。が、勢いが殺されていたのか、致命傷を与えることはできなかったようだ。異形が悲鳴のような、興奮したような声をあげる。叔父はそんな異形にさらに一撃を加えた。その一撃を受けた部分が凹んで、じわじわ、と血が出ている。叔父は動きの鈍った異形に向かって、大きく剣を振り上げて勢いよく振り下ろした。

異形の顔面がぐちゃ、と音を立てて、なくなった。頭を失った異形は音を立てて倒れた。

ウォルトはその光景をスローモーションで見えるように見ていた。顔を上げると、困ったようにこちらを見ている叔父と目があつた。

「大丈夫だったか？」

そう優しく問いかける叔父に

「ありがと、おじさん」

と、ウォルトは答えた。叔父はウォルトに対して怒りはしなかった。それが幸いして、ウォルトは気を落ち着かせることが出来た。落ちて着くと、先程の好奇心がむくむくと膨れ上がってきた。

「おじさんおじさん、今のが、いぎょうですか？」

「そうだぞ。足が八本、手は四本あったんだぞー」

冗談のようにかえす。しかし、その話は本当でウォルトが辿り着いた時にはもう半分の手足しかなかったのだ。

異形が、悲鳴を上げたウォルトに悪あがきのように向かっていたのもそついう理由からだったようだ。

ウォルトがその好奇心を満たすと、右腕から血が出ていることに気付いた。手合わせの修練の怪我と一致したその光景がウォルトの意識を今に引きずり戻した。川で洗われたその右腕の血はすでにきれいになっていて、切り傷などなかったような自分の肌が見える。

「よし、そろそろ戻るか……」

ウォルトは溜息を一つついて立ち上がり、叔父の剣技を思い出しながら手合わせの修練の場所に向かっていった。

手合わせの修練が始まってから、ずっと負け続けていたウォルトだったが、今回もその例に漏れず、一勝もできないまま手合わせの修練が終わるのであった。

### 3話 剣と雨

長い雨が降っていた。雨が降っていると修練は休みになる。

それでも、ケンは体を動かしたくてまた村の周りを走りこんでいた。雨を吸った衣服は重く、ふくらはぎのあたりになで泥が撥ねているが、そんなことは気にせず黙々と走る。動いていないと頭の中で悪いことばかり考えてしまいそうだった。

一向に縮まらない祖父との差、今も気を抜かずに村を守っているであろう父親。こんなことばかり考えてしまうのは雨のせいだろうか。

「もっと強くなりたい」

誰に言うでもなく呟いて、ケンは自分の意思を確かめた。

家に帰ると濡れた体を拭くための布が履物を置く場所の一番上に置いてあった。おそらくサヤが用意してくれたものだろう。その布を取りつつケンはサヤに声をかける。

「ただいま、サヤ」

「……」

ケンが声をかけるが、サヤの反応はない。正座をしつつ、うつむいていてその表情はよく見えない。

「寝てるのか？」

そう言いつつサヤの肩に手を置くと、サヤは体をびくっ、と震わせた。

そのまま顔をあげて咎めるような目でケンを見つめた後、ため息をついた。

「驚くから急に現れないで」

「何してたのさ」

ケンは別に急に現れたわけではなかったが、サヤが怒っているのがわかったので訂正したりはしなかった。

「精霊を素早く呼び出す練習をしていたのよ」

サヤは立ち上がって答えた。ケンは、練習の邪魔をしてしまったのだと気付くと申し訳なさそうな顔をしてごめん、と素直に謝った。ケン自身も剣の修練をしていた時に邪魔されたら不機嫌になるのが容易に想像できたからだ。素直に非を認めたケンに

「じゃあ私夕飯の支度をしてくるね」

と、言っただけで採れた野菜を片手に家から出ていった。その後ろ姿を眺めながら、明日の天気のことを考えるケンであった。

ケンが家に帰ってしばらく経つ。だんだん、雨が地面を叩く音が大きくなってきている。

ケンは、こりゃ、明日の修練もないだろうな。などと呟きながら立ち上がる。

どうやらごろごろして休憩するのに飽きたらしく、彼の愛用の大剣のほうへ歩いていった。もう長いこと使っているその剣は、重厚な作りでもらったときのままのような頼もしさがある。しかし、剣先が少し削れてしまっている。

あの雨の日の次の日に、ケンが父親に

「短剣じゃなくて大剣で修練がしたいです」

と、我俣を言ってそれを聞いた叔父がくれたものだ。彼曰く、

「余っていたやつだから気にしないで」

と、いうことらしかった。

それからというものの、ケンはずっとその剣と共に修練を重ねてきた。もらった当初は、振ることはもちろん出来ず、背中にかついで歩くだけで精一杯だった。

ケンとしては、剣先を地面につけない努力をしたつもりだったが、いつの間にか剣先が少し削れてしまった。ケンの身長がそれらしくなっただけから、素振りを始めたのだが、これもまた大変なことだった。今では、手合わせの修練が出来るほどになったが、この剣を使い始めたのケンからすれば素晴らしい成長である。しかし、弟に勝てなかつたり、このままでは村を守れないと言われたりしていたケンは、そのことに気付くことはなかった。焦りだけがケンの強くなりたい、という気持ちの糧の大部分であった。

ケンが何か今できる修練はないかと、試行錯誤しているとサヤが慌てた様子で帰ってきた。ケンは、ずぶ濡れのサヤに拭く物を渡しつつ、何かあったのか、と声をかける。

「さつき、川で野菜の泥を落としていたら、ケンの父親の『鞘』の  
人が応援が欲しいって言ったの。グ  
レイツくんはもう向かったみたいだから、ケンも急いで」

そうサヤが説明すると、ケンは愛用の大剣を背負って、勢いよく家  
から駆け出していった。

サヤもそれに続き山の方へ向かう。雨はさらに激しくなっていた。

#### 4話 剣と邂逅

さらに強くなる雨の中、ウォルトとノアは川伝いに走った。

遠くから剣と剣がぶつかり合う音が聞こえる。その方向に進路を変えつつ、速度を上げた。

二人分のばしゃばしゃ、という足音に混じって、ウォルトが幼い頃に聞いたあの異形の声が聞こえるようになった。規則的に聞こえるその声が大きくなると、急に視界が広がった。

そこには、薙ぎ倒された木々と異形と対峙する父親の姿があった。グレイツがどこにいるかはその場所から見えなかった。

異形は遠目から見ると人間の姿に近かったが、よく見ると背中からも腕が二本生えており明らかに人間ではなかった。その足は骨のようなものだけで作られていた。脛にあたる部分の表面には無数の針が付いていてその先から水が滴っている。その骨の部分は腹の部分まであり、胸からは肉体になっている。

肩から伸びている腕は毛むくじゃらで、その手にはその剣らしき武器が握られている。

しかし、背中から生えている方には武器は握られていなかった。背中には無数の武器が刺さっていて、それが原因で背中の腕は機能していないように見える。顔には、大きく裂けている口と耳のような突起物があった。鼻に当たる部分には、二つの穴が空いていて、その上に何も無い空洞の目があった。

頭頂部には白い骨があるようだ。異形の姿を確認して、ウォルトが剣を構えつつ父親に声をかけた。

「父さん、何があったんですか？」

父親は異形と対峙したまま答えた。

「気をつける。奴はのろいが、馬鹿力だ。俺が隙をつくるからその時に思いっきり叩き込んでやれ」

父親はそれだけかというと、異形に接近を始めた。父親はグレイツと同じく短剣を二本扱う型である。

対して、目の前の異形は、ウォルトが扱うような大剣を両手に持っており、その異常な膂力が窺える。

父親が異形の間合いまで入ると、異形の猛攻が始まった。と、いつでも剣を振るスピードは遅く、ウォルトでも目で追えるものだった。なぜ応援が必要だったのだろうか、とウォルトが思っていると、その理由はすぐに分かった。

父親の剣は先程から何回も異形に当たっているのだが、ダメージがまるで通っていないことに気が付いたのだ。骨の部分ではなく肉体の部分に攻撃が当たっているのに、ガキイン、という剣が硬い物にぶつかる音がしていた。

父親の剣を振るスピードはとてもはやくウォルトは目で追えなかったが、剣が当たったであろう部分に火花が散ったり、音がしている。どこに攻撃が当たっているか、ということ想像するのは容易いことであった。

そうか、もつと威力のある重い攻撃が必要なのか、とウォルトが気付いたとき、異形が片膝をついた。何をどうすればあの攻撃の通らない異形が片膝をついたのか分からなかったが、勝機であることは間違いなかった。

「いきます」

ウォルトは鋭く声を上げて、異形に向かって愛用の大剣を振り下ろした。が、そこにはびくともしない異形の姿があった。全力で振り下ろした剣は当たったことは当たったのだが、やはりガキイン、と

いう音と共にはじかれてしまった。  
しかも、その振動が手に伝わりウォルトは剣を落としてしまった。  
手がビリビリ、として痛い。  
そのことで判断力の鈍ったウォルトは、異形がその体勢のまま攻撃  
してくるとは思わなかった。  
ウォルトの方に向けてゆつくりと振られたその剣にウォルトが気付  
いたときにはもう遅かった。今から避けようとしても避けられない。  
しかし、次の瞬間にウォルトは信じられないものを見た。

父親が、こっちに向かって振られている剣と合わせるように自分  
の剣を振り下ろしていたのだ。  
両者の剣がぶつかり合ったとき、父親はウォルトを飛び越して吹き  
飛んでいった。ドサツ、という音と共に父親が地面にぶつかる。  
父親の手首はありえない方向に曲がっていて、その腕の皮膚が所々、  
破れているようだった。遠くでノアの悲鳴が聞こえる。  
呆然と動かない父親を見ると、近くの草陰から父親の「鞘」が、  
駆け寄ってその体を移動させ始めた。一旦此処から離れて治療を行  
うつもりらしい。  
ウォルトは一人で時間を稼ぐことを余儀なくされたのであった。

ウォルトの弟、グレイツがその知らせを聞いたのはウォルトより  
すこしはやかった。  
その場にいたノアと一緒に応援が欲しいという父親の「鞘」の話  
を聞いて急いで山の方へ走り出した。

村の山側の出口には既にバルドーがいて、こつちだ、と告げて先行を始めた。それについていくと、森の開けた場所にでた。異形と戦っている叔父の姿がそこにあり、その顔は苦痛にゆがんでいた。見ると、片方の足を引きずりながら戦っているようだ。

「叔父さん、応援にきました。治癒を受けてください」

グレイツがそう叫ぶと、叔父はちら、と、こちらを見て

「頼む。時間を稼いでくれ」

と、グレイツに言って離脱を始めた。入れ替わりでグレイツはその異形の前に立った。

先程見た様子ではあまり速さはないらしい。避けることだけに専念すれば問題ないはずだ、と考え、グレイツは異形の攻撃を避け始めた。異形の攻撃を見切った少年は順調に時間を稼いでいった。

グレイツ達は知る由もなかったが、その異形はウォルト達の方に現れた異形と酷似していた。

違う部分といえば、グレイツ達の方の異形の背中には武器は刺さっておらず、鼻や目なども空洞などではなく人間と同じようなものがあったぐらいだ。

「グレイツ、隙を作ってくれ」

少しして戻ってきた叔父はそうグレイツに言った。避けるのは楽だが、隙を作るのはどうだろうか、と内心思ったが、叔父の信頼に答えねばならないと思ったグレイツは

「わかりました。あぶなくなったら助けてくださいね」

と、言うのと避けるだけの動きから、異形の隙を突くように立ち回りを变化させた。

叔父はグレイツの剣の才能を信用していた。治癒を受けながら見ていた彼の動きは危なげなく、余裕があるように見えた。叔父はグレイツの戦いぶりを見ながらその瞬間をじっと待った。

グレイツは襲ってくる四本の剣を避けながら試行錯誤していた。先程一撃だけ異形の肉体の部分に当たったのだが、結果は芳しくないものだった。ふと、グレイツの脳裏にある考えが浮かんだ。

切って駄目なら突いてみてはどうか、と。

そう思いついた後のグレイツの動きは完璧だった。異形の剣を避けつつ、後ろに回りこんだグレイツは異形の片方の足を鋭く突いた。その一撃は異形の体勢を崩すことに成功し、大きな隙を作った。

あとは、叔父の仕事だな、と思ったグレイツが異形の間合いから身を引くと叔父が切りかかる瞬間が見えた。叔父の剣は異形の肩の部分から胸の辺りにかけて大きくめり込んでいた。

異形がその大きな口から断末魔のような叫び声を上げて倒れた。その体は大量に血を噴き出した後、砂のようになった。異形の成り果てのその砂にはもう雨が染み込んでいた。

「やはり、グレイツは優秀だな」

と、零す叔父にグレイツは笑みを投げた。

避けることで精一杯のウォルトは先程から何者かが話しかけてきているような気がして、目の前の異形に集中できずにいた。剣を捨に行く暇もなく、逃げることは許されない。素手で避けることだけしかできないウォルトは体力、精神力の限界も感じていた。そんな状態が続き、ウォルトは異形の振る剣がだんだん早くなっているような感覚にとらわれていた。

異形の片方の剣がウォルトの腕のすれすれを通っていく。

「ぐっ……」

直撃ではなく、かすただけであつたが、ウォルトの腕の表面はズタズタになつた。

痛みや、もつと大きく避けなければならぬ状況がウォルトの精神力をどんどん削つていく。

動きの鈍るウォルトに異形の振る剣が右足に直撃してウォルトは吹き飛ばされた。半ば広場と化していた場所からその端まで吹き飛ばされたウォルトは、木の幹に打ち付けられた。ガサガサ、と音がして、緑色の葉が上から降り注いだ。

ウォルトは一步一步確実に地面を踏みしめて近づいてくる異形の姿を葉の隙間から見た。もうすでに感覚のない足先と足の付け根から感じる激痛と、目の前で剣を振り上げる異形の姿を見て、ウォルトの精神は完全に擦り切れた。

「おい、小僧、いつまで無視するつもりだ！」

声が聞こえた。

## 5話 剣と盟約

「おい、小僧、いつまで無視するつもりだ！」

先程から聞こえていたような声が、はつきりと聞こえる。男のような、女のような中性的で、それでも威圧感のある声だ。ゆっくりとこちらに向かってくる異形の剣を見ながら、意識をその声に向けた。

「小僧、生きたいなら首を縦に動かせ。我と盟約と交わすか？」

ウォルトは、こく、と僅かに頷いた。ここで死んだら、周りの木の陰から見ているであろうノアにとても嫌なものを見せてしまうし、まだ弟にすら勝てず、村を守る剣として一度も村を守れずに終わることになるのだ。そんなことは嫌だとウォルトは思った。

突如、異形の背中に刺さっていた一本の剣が怪しい光を放つ。その真っ白な刀身が徐々に淡い桃色に染まる。その桃色が確かなものになるにつれて、異形の動きが鈍る。刀身が桃色からさらに濃くなり真紅になっていく。

突然、異形はウォルトの目の前で砂のように崩れて、ザーザー、と降る雨が異形の砂を濡らしている。砂と地面との境界線がわからなくなり、赤い液体がそれに混じる。

ウォルトが、砂に混ざっていく赤い液体を辿ると自分の足が見える。赤い液体の根源は自分の体だったのだ。ウォルトの右足は付け根から無くなっていて、その断面からは血が流れ出している。

積もる葉の隙間からも赤い液体が見えた。それ以上自分の血液を見たくない、と思ったウォルトがなんとか顔を上げると地面に無造作に落ちている真紅の剣が目に入る。

「主、我は只の剣ではない」

そんなことはわかってるよ、と返そうとしたウォルトであったが、青くなつた唇は動いてくれない。血を流しすぎてくらくら、と揺れる視界で目の前の景色が色をなくしていく。

「これはいかな。盟約を交わした主が早々にして逝くのは我としても良しとするところではない」

真紅の剣はだんだんと色褪せていき、異形の背中に刺さっていたときのような白色となつた。

ウォルトからすれば、だんだんと色を取り戻していく景色の中の一つだけ、色の変わらない剣が落ちていただけだが。色の無くした剣がウォルトに語りかける。

「主はこれより人ではなくなつた」

ウォルトは耳を疑つた。目の前の剣は、自分がもう人ではないというのだ。

剣の言葉を反芻しながら自分の身体感覚が戻っていくのを感じた。右足の付け根から違和感がする。

その違和感がゆっくりと右足の付け根から大腿部へ移っていくことにウォルトは嫌な予感がした。

痛みを耐えながら視線だけを向けて確認した先程とは違い、今は軽く頭ごと動かせる。

そして、ウォルトは見た。自分の足が再生していくその異常な光景を。

言葉を失つたウォルトに剣が言う。

「異形の血を輸血した。感謝するがよい。主は、生き延びたのだ」

ウォルトには、輸血、という言葉の意味は分からなかったが、人ではなくなったということを告げられていることは分かる。人の体では、あの重症から生き延びることはおろか、無くなった部分が再生するということはないのだから。

ウォルトは、自分の右足が再生する様を見ながら、次にすべきことが浮かんだ。ノアのことを気にかかったのだ。ノアを探してキョロキョロしていると、見慣れた金髪の少女が背を向け、走っていくのが見えた。

ノアはその光景をじっと見ていた。だんたんと動きの鈍っていくウォルトが異形の一撃を受けて木まで吹き飛んだ時には思わず悲鳴をあげそうになった。それをぐつと抑えてウォルトの方に目を凝らす。

右足は一撃を受けた際にちぎれたらしく、なくなっていた。ウォルトに近付いていく異形を呆然としながら見ていると、異形の背中に刺さっていた剣が光ったかと思うと、異形が砂になったのだ。その剣以外の武器は異形と共に砂になったようだ。

その場に、カタン、と真紅の剣が落ちる。何か起きたのか分からず混乱したノアだったが、ウォルトを一刻も早く治癒しなくては、と思いついて走り出した。しかし、木の根に足をとられて躓いてしまふ。

「あいたた……」

つい、痛いと声を出してしまったが、木の根元でぐったりしている青年の痛みの方が大きいことは明白である。

ノアが立ち上がるうとしながらウォルトに目を向けると、ウォルトの足が再生しているが見える。

ノアは、その異常な光景を目の当たりにして思考がぐちゃぐちゃに

なっていくのを感じた。

自分と対である「剣」は、違う生き物になってしまったように感じた。本能が、あれはもう人ではない、今すぐ逃げ出せ、と、命令する。ノアはウォルトに背を向けて走り出した。

ウォルトは、遠ざかっていくノアを見ながら、自分はもう人じゃないんだ、と再確認した。

## 6話 剣と別れ

ウォルトは落ちている白い剣を手に取り、話しかけた。

「なあ、俺は今何者なんだ？」

剣は何でもないことのように答える。

「主の血には、今、人のものと異形のものが入り合っている。我が先程の異形の血を主に与えたせいで半分異形で半分人間という訳だ。先程の異形は我の前の盟約者等がその命を落としてまでも封印した奴でな、その回復力は異形の中でも異常なものであった。封印の一部が壊れ、奴が動き出した時、我はこれを次の盟約者を見つける機会だと思い、その背中で息を潜めておったのだ」

あまりにも長い答えを返す剣に文句を言おうとしたウォルトであったが、この剣が異形を倒さなければ、この剣が自分に血を与えなければ、そのまま死んでいたのだ。

言わば命の恩人、文句など言う資格もない、と思ったウォルトは言葉が続けることができなかった。

「ところで、主よ。主は我と盟約を交わした訳であるが、何か聞きたいことはあるか？我の前の盟約者も初めの頃は、我に質問攻めをしてきおった。よって主も遠慮することはない。我は永く生きておるから、知らぬことはあまりないぞ」

白い剣はウォルトに問いかける。「盟約」という言葉の重みはウォルトも知っていた。

命果てるまでずっと続く約束のことを「盟約」と呼び、村を守る剣

と鞘の関係もそれに当たるのだ。

思い返せばあのときは正常な判断すらできない状態で、ただ、生きたい、と思ったウォルトは反射的に頷いたのだ。聞きたいことはたくさんあった。ノアを追いかけるか、この白い剣と生きるために話をするのか、ウォルトはしばらく考えて答えを出した。

「歩きながらでもいいか？」

「勿論」

白い剣はその中性的な声で簡潔に答えた。

森の中をゆっくり、自分が生きていることを一歩ずつ確認しながら村へ向かうウォルトは白い剣に問いかける。

「お前は何だ？さっきは只の剣ではない、とか言っていたが」

「いかにも。我は、只の剣でない。が、名も無い。我はただ、主と盟約を交わした剣だ。主は盟約により我の加護を受けた。否、人からすれば呪いと呼ぶだろうが。主を人でなくしたのも我の仕業だ。しかし主は、あの様な状態に陥っていたというのに、よく平常心を保っていられるな」

一つ聞けば十が返ってきて、尚且つ疑問も増やしてくれるこの白い剣に呆れてウォルトは溜息をついた。

剣としてはただ知っていることを説明したつもりなのだが、どうや

らウォルトはその話の半分程しかついていけてなかった。

「加護とは何だ？」

ウォルトは次々と湧き上がる疑問を一つ一つ解消していくことにした。ウォルトの歩く速度では村まではあともう少し時間がかかる。白い剣がその疑問達を一つ一つ解消していくように喋り始めた。

「主は我と盟約を交わした訳だが、その盟約の名を『血の盟約』という。我は、この身を持って主に仕えるつもりであるが、主には我にその代償として血を捧げてもらう。別に、どのような存在の血液でも構わぬ。元々、この世界で生きとし生ける者全てには血液がある訳なのだが……」

疑問を解消したついでに、白い剣はさらに話を続ける。あまりにも長すぎる白い剣の説明にウォルトがついていけなくなっていることにやっと気付いた剣が喋るのを止める。村が近付いてきていることに気付いたウォルトはまた今度ゆっくり聞きよ、と言った。

ウォルトの視界に村の山側の出口が見える。それと同時にその出口に立っている複数の人々が見えた。この時、ウォルトはあまりにも遠い場所からそれを視認したのだが、彼はそれに気付けなかった。村の出口に立っている人々がウォルトの姿を認めると、皺のあり白いひげの長く伸びた老人が威厳のある声を上げた。

「それ以上近付くでない。異形に墜ちし者よ。今すぐこの村から立ち去れ！」

この白いひげの老人は、ウォルトが住む村の長である。

ノアが、ウォルトが欠損した体を再生している様子を見て逃げ出し、村長の家へ駆け込んだのだ。そこには、グレイツやバルドー、叔父と叔父の鞘もいた。息も切れ切れにノアがそのことを伝える。しかし、ウォルトが異形と化したことを彼らは既に知っていた。ウォルトの父親達が先に戻りその話をしていたのだ。それを聞いた村長は、ウォルトを追放することに決めた。村長の決めたことに従うのがこの村での当たり前であった。そして彼らは、ウォルトが来るであろう村の山側の出口で待つことにした。

村長やノア、弟達、叔父までもが揃って待っていたのを遠くから確認していたウォルトは、彼らが自分のことを心配して待っていてくれたのだろう、と思っていた。それだけに、村に入るな。出て行け。と、言われたウォルトが受けた衝撃はとても大きかった。時間を稼げ、と言われてそれすら出来なかった不甲斐無い自分と、確かに人ではなくなった自分、そして、傷つきながらも生きて帰ってきた自分が村から出て行け、と言われたということがウォルトの心をスタスタに引き裂いた。足を止めたウォルトは一言、

「お世話になりました」

と、だけ返した。今、彼に出来ることはそれが精一杯だった。そして、背を向け歩き出すウォルトを、村長達は眺めるだけだった。

## 7話 剣と決意

村から追い出されたウォルトは、少し歩くと川の近くに座り込んだ。降り続く雨が川の表面を叩いて、たくさんの波紋を生み出していた。もう太陽は傾いていて、すぐに暗闇に染まるだろう。

しかしウォルトは、そこから動く気配もせずに、泣き叫んでいた。もうすぐ止みそうな雨に混じって、大粒の涙がいくつもこぼれる。その場が完全に暗闇に包まれると、雨は既に止んでいたが、ウォルトはまだ泣いていた。

白い剣は何も言わなかった。そしてそのままその夜は過ぎていった。泣きつかれて眠ったウォルトが目を覚めたのは日が高くなった頃だった。

ウォルトが体を起こすと、体にかかっていたであろう布が足のほうへずり落ちていった。

周りを見回すと、川岸にある大きな石の上に魚の頭が口を上に向けて置いてあった。村に伝わる安全祈願の印だ。村人の中で狩りを行う者の家の中にも同じ物が飾ってあるはずだ。夜中のうちに誰かが置いていったらしい。

「主、主は何を望む？これから何をして生きるのだ？折角盟約を交わしたのだ。直ぐに逝ってもらっては困る」

そばに落ちていた白い剣が言葉を発した。昨日からずっと黙り込んでいたその白い剣の声がやけに懐かしく聞こえた。剣の難しい問いにウォルトは答える。

「俺はこんな状況にしたヤツを許せない」

「左様か。我も人の生き血はあまり嗜んだ事がなくてな。味を覚えるぐらいに殺してくれるのか？しかし、主がこの様な事を言うとはな。我の見込み違いであったか」

白い剣が少し呆れたように返してくる。しかし、止めるつもりもないらしい。ウォルトが、口元を吊り上げつつ答えた。

「違う。世話になった場所に復讐するようなことはしない。俺は、こんな状況にした俺が許せない」

それは自嘲の笑みだった。その表情のままウォルトは続ける。

「俺は強くなる。強くなって、村を守る剣として生きたい」

「我は助力を惜しまぬ。主の剣となり、師となろう」

ウォルトは、短く交わされた言葉に盟約以上の頼もしさを感じた。

「先ず、主には一人で生きる事が出来るようになってもらわねば。我も安心出来ぬからな。主よ、人が生きる為には何が必要か分かるか？」

「食い物だ」

白い剣の問いにウォルトは答える。よく考えれば昨日から何も食べていないことに気が付いたが、何故か空腹を感じない。

「では、異形が生きる為に何が必要か分かるか？」

しばらく考えた末にウォルトは自信ありげに答える。

「人の肉か？」

異形が村を襲いに来る理由を考えればそれが一番ありそうだとウォルトは思った。しかし、白い剣の答えに眉を顰めた。

「半分正解で、半分間違いである。異形が本当に生きる為に必要な物は『魔』だ。『魔』は、世界中に満ち如何なる物にも存在している。そして、『魔』は宿った物と混ざり合っている。異形が求めておるのは人と混ざった『魔』だ。異形は村から漂ってくる人と混ざった『魔』の味を知って、求めておるのであるうな」

初めて聞く存在にウォルトは顰めた眉をそのままにして一人考える。もしかしてこの空腹感のなさは、自

分の体に流れる異形の血の力で魔を食らっているからなのだろうか。いよいよ人らしくなくなってきたな、と眉を戻して苦笑する。同時に、このように考えて苦笑出来る程落ち着いている自分を見つけて驚く。人は一人では生きられない。支えてくれる存在がいるだけでこんなにも気持ちになるのか、と。

「どうやら、俺は魔を食べているみたいだ」

「我も半分異形で半分人などという存在は初めて見た。その様な存在を造ったのは我なのだがな。我自身も驚いておる。拒絶反応を起こすかと思つたが、どうやらその様子もなさそうであるしの」

時々、ウォルトには理解できない言葉を含める剣の答えを気にする

ことなく、村を守る剣に戻る為に重要な事を聞いた。

「俺は人に戻れるのか？」

白い剣は少し考えて答える。

「初めての存在である為、确实とは言えぬが、異形の力を使わなければ人に近付くことは出来よう」

白い剣の言葉に少しの希望を見出したウォルトだったが、生き残らねば話にならない為、これから生きる為に何をすればいいのか、ということに集中することにした。

「これからどうすればいい？」

「そうだな。主には先ず、剣の腕を磨いてもらおう。この山の頂上を目指せ。初めのうちは無理だろうから獣を狩ることから始めろ。

我も血が欲しいのだ。一石二鳥であろう？」

ウォルトは、白い剣の言葉に頷いて立ち上がる。

このまま山を登るのは明らかに無理なので、山の周辺を回りながら徐々に高度を上げていくことに決めた。

知らない言葉の意味を教えてもらいながら歩き出したウォルトは、村の方角を振り向くことはしなかった。

## 8話 剣と狩獵

ウォルトの修練は、獣を見つけることから始まった。やっと見つけた山兎は、ウォルトの姿を確認すると一目散に逃げていった。その後を追おうとしたウォルトは自分の体の異変に気が付いた。

明らかに体が軽い。軽く走っただけなのに自分でも驚く程のスピードが出たのだ。

そして、そのことに気をとられたウォルトは山兎を見失ってしまった。

「主よ。もっと目を養え。目、見る力は重要だ。戦うにも、生きるにも目がなくては始まらぬ。あの太い幹の後ろだ」

白い剣がそう教えてくれたので、できるだけ足音を立てないようにしてその木に近寄る。

幹の後ろにさつと回りこむと山兎がそこにいた。逃げようとする山兎の耳を掴むことに成功したウォルトであったが、その喜びは長くは続かなかつた。掴んだ部分が潰れて山兎が悲鳴の様な声を上げたからだ。

キューキュー、と泣き声をあげる山兎に、無言で白い剣を差し込んだ。何かに引っかかることなく突き刺さった白い剣は淡い桃色を帯びた。

「ふむ。量が少ないな。まあ、今日はこれぐらいでいいだろう。ところで主よ、解体の方法は分かるのか？肉を食らいたそうな目をしておるので気になってな。もし知らぬなら教えてやるう。我を解体の道具に使うことも許可しよう」

「教えてくれ」

素直にウォルトが言うと、淡い桃色の剣が丁寧に教えてくれた。叔父にもらった剣ではこのようなことは出来なかったであろうが、この淡い桃色の剣は、長さは叔父にもらった剣とかわらないが、幅は半分ぐらいであり、その薄さは比べるまでもないほど違っていた。この淡い桃色の剣はひたすらに薄かった。そして、鋭かった。

山兔をなんとか解体したウォルトは重要なことに気が付いた。

「火はどうするんだ？」

「火を焚くのは勧めないな。理由は後で説明するが。肉を食らいたいならそのまま食べればよからう」

淡い桃色の剣の言うことに納得がいかないウォルトであったが、その言葉を受け入れ、その日初めて生肉の味を知った。獣の臭いが強くて度々吐きそうになったが、物を口に入れて咀嚼することが久々のように感じられて、山兔一匹分を丸ごと平らげてしまった。

そしてその夜、淡い桃色の剣が火を焚くのを進めなかった理由がようやく分かった。木々の隙間から闇に輝く二つで一对の光が幾つも見える。

どういうことかとウォルトが聞いたすと、淡い桃色の剣は澄ましたような口調で答えた。

「主はもう獣程度では死なんだろうから、こちらから呼び出したま

でのことだ。我に血を吸わせれば血の臭いが漂い、獣共を惹く事ができるといふ訳だ。さあ、来るぞ」

淡い桃色の剣の言葉を引き金に、獣達はウォルトに飛び掛った。

この淡い桃色の剣はとても軽かった。それに加え異形の血が流れているウォルトの剣を振る速度は凄まじく、線の攻撃が途切れることはなかった。が、しかし、それは敵が正面からのみ襲ってくる場合に限って効力を発揮するのである。

前後左右を獣に囲まれている上に、獣との距離感がうまく掴めないウォルトがその攻撃を当てるのは困難だった。ふと、左足に何か鋭い物が食い込んだような痛みが走る。一匹の獣がその足に噛み付いていたのだが、この暗闇でそのことを見極めるのは難しかった。

ウォルトが左足の方に乱暴に剣を振ると足に食い込んだ何かが離れていくのを感じた。獣の口が離れた瞬間にウォルトの左足に走っていた痛みが消えた。ウォルトが一匹の獣を屠ったが、獣達は引く気配を見せない。それどころかその攻撃はさらに激しいものになった。

夜が明ける頃には、破けた服を纏う無傷の青年と獣達の死骸がそこらじゅうにあり、淡い桃色だった剣の色が少し濃くなり、赤に近付いていた。

獣が全て動かなくなっていることを確認して、ウォルトはその場に座り込んだ。

「我が計らいはどうだった、主よ。目を鍛えるのには丁度良いと思うてな。少々手荒であるが、問題なかったであろう？この調子なら五日程すれば下位の異形とも戦えると思うぞ。ところで主よ、疲れおるなら休むべきだが、どうなのだ？」

「少し、疲れたから休みたい」

ウォルトが正直に言うと、剣はそれを了承した。身体が疲れていなくとも、ウォルトの精神は長く続いた緊張に疲れきっていた。精神は疲れていたが、眠気はしなかつたので剣に質問をぶつける事にした。

「ところで、カイの異形のカイとは何だ？」

「下位というのは、簡単に言えば弱い方という意味だ。どうだ、分かりやすいだろう？この山を越えればいくつかの町や都市があるわけだが、そこでは下位や上位と言葉で、異形の強さを分かりやすくしているのだ。上位というのは強い方という意味である」

ウォルトは、初めの方はうんうん、と頷いて聞いていたが剣が言葉を続けるとその表情は驚きに包まれた。ウォルトはたまらず剣に問いかける。

「他にも人が住んでいる場所があるのか？」

「当たり前だ。何を言っておるのだ。この島に住んでおるのは主等だけではあらぬ。島、というのは広い水溜りに浮かんでいる大地のことをいうのだが、まあ後回しだ。この島の他より広い大地、大陸というのだが、そこにもたくさんの方が生きておるのだ。それも知らなかったとはな。そうだな、これからそれらを回ってみるのもよかるっ」

ウォルトは自分の中での世界がいきなり広がり呆然としていて、剣の決めた重要なことが彼の耳に入ることはなかった。

## 9話 剣と学習

剣の話してくれることはほぼ全てウォルトを驚かせたり、呆然とさせたりした。

これまで、村を守る剣として剣術だけに全てを捧げてきたウォルトは自分の知識が増えていくことに快感を覚え始めていた。生きる為に必要なことやこの世界のこと。剣の話を知っている間は、自分が置かれている状況をつい忘れてしまいそうになる程であった。

獣を見つける為に歩き、凶暴な獣と戦い、休んでいる間に剣の話を知った。五日間、ウォルトは一睡もしないままにその一連の流れを続けた。五日目の陽が昇り、周囲を囲む獣を全て倒しきったウォルトに、随分と赤色に染まった剣が話しかけた。

「そろそろ下位の異形にも勝てるころになっただろう。主は今異形の血が混じっておる為、我が見ても素晴らしい成長をしておる。今の状態のままなら下位の異形でも倒せるであろう。だがしかし、いつまで異形の力を使いながら戦うのだ？主は人に戻りたいらしいが、いつまでも異形の力に頼っているのでは人に近づくことはおるか、完全に異形に堕ちてしまっても知らぬ」

言葉の返せないウォルトに剣が追撃する。

「と、いうわけであるから異形の力を抑える修練が必要だ。主は今、異形の力は抑えることは出来るのか？現状把握は大事だ」

剣が次の方針を立てる。ウォルトはしばらく目を閉じて答える。

「駄目だ。今は何も感じられないみたいだ」

ウォルトが答えると、剣は何かを考えるように黙り込む。ウォルトは思考を巡らせて、異形の力を感じた瞬間を思い出す。

この五日間の修練で傷ついた時や最初に自分の右足が再生した時のあの違和感がそうなのだろう。という結論に至ったウォルトは、剣に出会って初めて自分から修練を考え出した。

「おい剣、今夜から火を焚いていいか？」

獣が火を怖がるということを教えてもらっていたウォルトは、自分で考えた修練を始めることにした。

ウォルトが自分の考え出した修練とは簡単に言えば、自分の体の傷が一瞬で癒えなくなるようにすることを目標にした滅茶苦茶な物だった。しかもそれは、下手すれば何回も何回も異形の力を使うことになる。

しかし、手っ取り早く異形の力を抑えることにも繋がるのだ。あの違和感が、異形の力の正体であると思っただウォルトは、それを抑えれば、異形の力を抑えることになるのではないか、と思いついた。

このことを話すと、剣は驚いた。正確にいえば驚嘆している声を上げた。

「ほう。良い修練を考えたな、主。どうやら主は、体で覚えることが大層好みであるのだろうな。否、最

初に体で覚える修練を強いたのは我であったわ。主が段々我が色に

染まっっていくようだ」

「獣の血の色をした真っ赤なお前のような肌にはなりたくないな」

「その様な意味では無いぞ。どうせ主は体で覚える、という言葉の意味も分かってないのである。修練もいいが、勉強も主を強く豊かにする。体で覚えるということは……」

ウォルトは、剣の講座を目を子犬のように目を輝かせながら聞きつつ、夜を待った。

膨大な暗闇の中で小さく光る火の横で一人の青年が自分の指を切り落とす。青年が目を瞑る。切り落とされた指は砂となって消え、青年の指が再生する。生えてきた指をまた切り落とす。また目を瞑る。

青年の足元には一滴一滴零れ落ちる血が溜まって地面を変色させている。変色した地面を照らしている火がゆらゆら揺れる。

痛みが大部分を支配している意識を、指が再生する瞬間の違和感に集中させるため、視覚を遮断し、聴覚を遮断する。

だんだんと、違和感の逃げ道が分かってくる。その感覚を忘れてしまふ前にまた違和感を無理矢理引き出して、逃げ道を封鎖する。意識の包囲網を掻い潜って逃げる違和感を追う。体に宿るその違和感が動き出すのを感じることが出来るようになったのは、ウォルトが考えた修練が始まってから三日が経過した時だった。集中していないと感じられない違和感を逃がさないようにしつつ、ウォルトの修練は次の段階に移行した。

体を傷つけた際に動き出す違和感を抑える。それだけ言えば簡単そうに聞こえるが、違和感を逃がさないだけで精一杯の今のウォルトには、簡単に出来る内容ではなかった。

痛みが邪魔しないように指を切り落とすことから、肌に切り傷を入れることに変えて、動き出す違和感を察知してその通り道を塞ぐ。勝手に癒える腕の違和感と戦っていると、だんだん腕が切られる痛み慣れてき始めている自分がいることに気付いて思考を乱したウォルトは、違和感から伸びる手綱を放してしまった。気付くと、既に夜になっていた。

剣にそれを言えば、集中して修練をするのはいいが、それが出来るのも異形の力だぞ。と返ってきて、ウォルトは寝ることにした。思い返せば、ウォルトはこの森に入ってから一睡もしていないのだ。明らかに人の為せる所業ではない。火を焚き、その近くで横になる。目を瞑った瞬間にウォルトの意識が落ちるのを感じた剣が独り言をつぶやく。

「緊張の糸を張り詰めすぎれば切れてしまう。それを管理するのも盟約者、否、師としての役割であるな。この若者がどのような名剣になるのか、楽しみだ」

その朝、久々に睡眠をとったウォルトは自分の体がとても軽いことに気が付いた。

修練も大事だが、休息も同じくらい大事だ、ということを経て覚えたウォルトは、体で覚える、という言葉の意味を復習しつつ、これが一石二鳥か、と苦笑した。

## 10話 剣と実力

休息の大事さに気付いたウォルトは、睡眠や休憩を挟みながら違和感を抑える修練を繰り返していた。

方法を変え、精神的にも体力的にも余裕のある状態で取り組めるようになったおかげか、ウォルトは七日程で、傷が出来たままの状態を保つことが出来るようになった。

しかし依然として、異常な動体視力や筋力が残っている。これらを完全に抑え込むことが出来なければこの修練は終わらない。以前と比べれば小さくなったが、まだ残っている異形の力は確実に存在している。

ウォルトが、この最後の仕上げをどうしようかと悩んでいると、剣が思いついたように言った。

「多少の力なら今の我でも封印を施すことが出来るぞ。代償として今蓄えておる血が全て失われてしまうがな。盟約者の力を封印するならば、主の同意さえあれば我を身体に刺さなくとも出来る。主の意志でいつでも開放できる簡単なものだ」

「そんなことが出来たのか。それなら早く言ってくれば良かったのに」

「その様にはいかなんだ。主が異形の力を制御出来る様になる前に封印をしてみれば、我がいなくなった際に主がどうなるか……。それに、上位の封印には多量の血が必要になる。今の我には出来ない」

剣が自分を心配していることを知り、気楽に剣に頼んだことを反省しながらウォルトは言った。

「力を貸してほしい」

「お安い御用だ。任せておけ」

赤い剣が輝いてその色を失っていく。ウォルトはその様子を見ながら、自分の中に存在していた小さな異形の力が感じられなくなっていたことを確かめた。剣は異形の力を封印してくれたようだ。再び色の褪せた剣が満足そうな声で言った。

「成功したぞ。これから主は自分の持つ力だけで修練を積むことになる。とは言え、これまでの通りだ。昼間は獣を探しながら。異形の力の無い主がどの様に戦うか楽しみだ」

剣を手に取り立ち上がったウォルトは、この剣のズシリ、とした重さを初めて感じた。

確かな重さのある剣を持ちながら、獣を探す。しかし、一匹も見つけられないまま夜になってしまった。どうやらこの辺りに獣達はいないらしい。ウォルトは、一日中歩き続けた所為か軽い疲労感を感じていた。肉体的な疲労感を感じたのは村を追い出されて初めてだな、と感じたウォルトはこれ以上村の事を思い出す前に眠ることにして目を閉じる。ウォルトの意識は暗闇の中に溶けていった。

次の日、目を覚ましたウォルトは自分の身体の異変に気が付いた。これまでずっと鳴りを潜めていた腹の虫が、空腹に対して猛抗議し

ていたのだ。今日こそ獣を捕らえよう、と心に決めて焚いていた火を消し、立ち上がった。

ウォルトが歩き始めてから半日ほど経ったが、獣の姿がまるでなく鳥の声すらもしなかった。

どこか不気味な森の中を進むウォルトは、変わらない風景の中で一つ動くものを視界の端に捉えた。

姿はよく見えなかったが、山兔のような大きさではなくもっと大きな獣のようだ。その獣の後を足音を潜めて追う。

しばらくすると、ウォルトは先程みた獣が木の根元で横になり休んでいるのを見つけた。

それは、山兔どころか、集団で生きる山犬より大きな獣だった。

その獣の体表はどこか神々しい程の美しい金色の毛で覆われている。金色の獣の足は強靱な筋肉を持っているが、どこかしなやかさを感じさせている。その体の先からは、ふさふさの尾が生えていて、獣の体を包むように丸まっていた。

ウォルトは、殺すことを躊躇わせる雰囲気を放つその獣に落ちている木の枝を踏まないように近寄る。

その雰囲気の前にしても、ウォルトは自分を支配する食欲を満たすべく行動していた。

とうとう隣の木までたどり着くことに成功したウォルトは、すっかり白くなった剣をしっかりと握り締めてその金色の獣に向かって斬りかかった。白い剣が金色の獣に触れるか触れないか、というところで金色の獣はその場から跳んで剣を避けた。

ウォルトと距離をとった金色の獣は白い剣を一瞥すると、ウォルトに向かって襲い掛かってきた。その強靱な肢体から生み出される速度で接近する金色の獣の動きをなんとか捉えたウォルトはその前足の鋭い一撃を右に体をずらすことで直撃を避ける。左肩に走った衝撃と共に赤い液体が飛び散る。

癒える気配の無いその傷を抱えながら、金色の獣のほうに剣を向ける。

ウォルトは、仕掛ける気配を見せずにこちらを観察する金色の獣に今度は自分から接近した。剣を当てるのが難しい相手にどう立ち向かうか、そのことを考えながら動いたウォルトは、今までの戦いでは物事を考えながら動く、ということをしていなかった自分に気付いた。

しかし、今は違う。自分の中で作戦を練って、相手と戦う。金色の獣に肉薄したウォルトは、剣を振る構えを見せながら金色の獣に自分の体をぶつける。ウォルトに体当たりされた金色の獣は、その行動が予想外のものだった、とでもいうような表情をしながら身体を傾けた。

体勢を崩した金色の獣に今だ、と剣を振り下ろしたウォルトはその目を疑った。確かに獣に向かって振り下ろしたはずの剣が地面に突き刺さっている。しかし、剣のその刀身が白から淡い桃色に変わっているところを見ると、まったく当たらなかったわけではなかったようだ。

ウォルトが辺りを見回すが、既に金色の獣の姿はなく、動きの無い風景の森が広がっているだけであった。食料を逃がして悔しそうな表情を浮かべるウォルトに剣が話しかけた。

「先程の獣からの伝言だ。なかなか見込みのある少年だな。と、ただがな。しかし、我が吸血に混じって此方に意志を伝えてくるなど、あの獣は只の獣では無いだろうな。主はどうやら見逃された様だ」

ウォルトの目に食料として映っていた獣は、どうやら只者ではないらしい。

下手すれば、食料の食料になっていたことや、癒えない左肩の傷に微妙な表情を浮かべながら、久々に感じた食欲という物に恐怖した。

その次の日ウォルトが目を覚ますと、山兔の死体と一筋の金色の毛が火の傍に置いてあった。久々に食べた焼いた肉の美味さに感動しながら、昨日の金色の獣の姿を思い浮かべていた。

## 11話 剣と再戦

久々に肉を食べて腹を満足させることができたウォルトは、今夜の食糧確保を目標に行動を始めた。

昨日までの静かな森の姿はどこにもなく、鳥の鳴く声が聞こえたり山兎の姿を見かけることができた。

なんとか一匹の山兎を捕らえることに成功したウォルトは、まだ日が高いのにそこで夜を明かそうと火を焚く準備を始めた。

ふと気付くと、獣の群れがこちらを囲むようにして近付いている。どうやら山犬がウォルトの狩った山兎の血の臭いを嗅ぎつけたらしかった。

完全に囲まれてしまったウォルトは木を背にして剣を構えた。足場が悪いが、それは相手も同じことだ、とそれを無視し、だんだんと包囲の輪を小さくしている山犬達の動きに集中する。

一匹の山犬が飛び掛ってくるのを合図にウォルトと山犬の戦いが始まった。

飛び掛ってきた山犬の体に合わせるように、剣を動かす。既に空中にいた山犬は方向を変えることが出来ずにそのまま剣に突進してその命を散らす。

ウォルトが死んだ山犬から剣を引き抜くのに手間取っていると、左から衝撃が走って突き飛ばされた。

突き飛ばされながらも剣を離さなかったウォルトが顔をあげると、三匹の山犬がこちらに襲い掛かってくるのが見え、先程の衝撃で死体から抜けた剣を地面に片足をついた状態で振り回す。まっすぐ襲ってきた山犬は横一文字に切られたが、真ん中の山犬は少し溜めを作っていて、無傷のままウォルトの喉元に喰らいつこうとした。咄嗟の判断で顎を引いたウォルトは、その頬に噛み付かれてしまった。

頬の内側まで到達するかと思った牙は、その表面に傷をつけるだけで終わった。

ウォルトは、自分に噛み付いていた山犬の胸に刺さっている薄い赤色の剣を引き抜く。次の瞬間に背中から山犬の体当たりを受けて完全に地面に伏してしまった。

ウォルトは、土の匂いを嗅ぎながら、脇腹に鋭い痛みが走るのを感じた。

脇腹を噛み千切らんとする山犬に剣を差し込んで山犬と逆の方向に身体を回転させる。

脇腹の痛みを無視して、残る山犬達を睨む。自分達の仲間が次々と死んでいるのを見て竦んでいる山犬に、今度はウォルトから接近して斬りつけた。その一匹が死んだのを境に山犬達は一目散に逃げた。ウォルトは痛む身体に鞭を打ってなんとか火を焚くと、まだ日があるうちに横になった。

脇腹の傷も痛むが、昨日金色の獣に負わされた左肩の傷も痛む。激しい動きのせいで傷口が開いてしまっていた。ウォルトはそのまま、気を失うように眠り込んだ。

日が完全に落ちて辺りが闇に包まれた頃、その中で輝く一筋の光の方向に金色の獣が向かう。やれやれ、手のかかる少年だ。とても思っているのかもしれない。

ウォルトが、頬に走る温かい違和感に目を覚ますと、自分の顔を舐める金色の獣を見た気がした。

夢心地のまま少しばかりその光景を眺めたウォルトは、そのまま睡魔に打ち勝てずに眠ってしまった。

日が高く昇り、その光がウォルトの顔を照らす。

光を浴びて目覚めたウォルトは身体の異変に気付いた。起き上がる  
ことが出来なかったのだ。

意識が完全に覚醒すると、昨日の戦いで傷ついた脇腹がひどく痛む。  
脇腹の激痛に耐えながら寝返りを打つと、木の実のようなものが一  
箇所にまとめて落ちていた。その木の実の山の一番上に金色の毛を  
見つけると、ウォルトは息をふう、と吐いてまた目を瞑って意識を  
落とした。

怪我を負って二日目にやっと動けるようになったウォルトはそば  
に置いてあった木の実を齧った。

豊富な果汁がカラカラだった喉を癒して、空腹だった腹が生き返る  
ようだと呼んでいる。

傷はまだ癒えておらず歩くたびに鈍痛がするが、耐えられない程で  
はなかった。その足で随分と赤くなった剣を持ち上げる。出会った  
頃の軽さはなく、ずっしりとした重さの赤い剣にウォルトは話しか  
ける。

「なんか重くなってるかい？」

「血を吸えば重くなるに決まっておろう。その分、重い一撃が放て  
る上に我が鋭さも増す。決して不利な状態ではないぞ。それより主  
よ、あの金色の獣はこの山の精霊だと言っておった。主が寝ている  
間にまた此方に接触してきたのだ。どうやら主の事を気に入ったよ  
うだな。選別を送っておく。と言っておったわ」

この木の実の山がその選別なのだろうか、とウォルトが思ってい  
ると、木の幹からひよこつと顔を出している獣を見つけた。隠れな  
がらウォルトの様子を伺うようにしている獣は、ウォルトが獣を見  
つけたと判断すると、木の幹から完全に出てきてその姿をさらけ出

した。

その獣は、青い毛なみを持っていて、山兔と比べると同じ大きさであるのだが、その胴体は細長かった。周りの匂いを嗅ぐようにひくついている桃色の鼻がちょこんと顔に乗っていて、その横から黒い毛が幾つも生えていて、その一つ一つが張り詰めた弓の弦の様にピン、と張られていた。すらりとした胴体の先からは半月状の尾が伸びている。幼い頃ウォルトが見た異形のカマのような尾だった。

その青い獣は、おもむろにウォルトに近付くとそのままウォルトの肩に乗った。突然のことに驚いたウォルトだったが、不思議と敵意は感じられなかったので振り払うこともせず、じっとしていた。青い獣がウォルトの頬にその頭を当てると、あどけない少女を思わせる声が聞こえた。

「こ、こ、こんにちは。わ、私いは……その、オサキ様から、い、言われて来ました。人と契約するのは、初めてなのですが、ど、どうかよろしくお願いしますっ！」

ウォルトは脇腹の鈍痛と闘いながら、頭が痛くなってくるのを感じた。

## 12話 剣と契約

「私は、水族の水刃すいじんの精霊です。わ、私達の種族は、水鼬みずいたちといいま  
す。どうか、よろしくお願いします……」

精霊のことをまったく知らないウォルトは何が何だか分からなかつたが、あの金色の獣、オサキのいう選別とはこのことだ、ということとだけは理解できた。ウォルトの分からない部分を剣が補足してくれる。

「水族とは、水を司る精霊の一族のことだな。他にも、火や土、風、神秘などがある。我が初めて見た精霊は土族の浄化の精霊だったな。あの頃は何と皮肉の効いた事か、などと思っておったが、良い相棒になれたわ。主も、精霊と契約するのは嫌ではないのだろうか？」

独り言のように話す剣に急に話を振られたウォルトは、戸惑いながら答えた。

「嫌なわけじゃないが、何ができるのか分からない。精霊が何かも分からない。契約を交わすなら相手のことはよく知っておきたい」

「我と盟約を交わした時はどうだったのだ？」

意地の悪い声を出す剣を無視したウォルトは、水鼬に問いかけた。

「精霊と契約するとどうなるんだ？」

「け、契約した人と……一緒に生きます。契約した人を私の力で、助けます。そしたら、私も成長で

きると思っんです!」

精一杯説明する水黽にウォルトの頬は思わず緩んだ。

ウォルトの肩に乗っていた水黽がその場を離れて地面に降り立つ。何をするのかと見ていると、水黽のカマのような尾が青い光を放つ。水黽と毛並みと同じ色のその光が半円を描く。

すると、水色の三日月のような刃が放たれた。その刃は近くにあった太い木の幹に当たり、音を立ててその木の幹の中間辺りまでめり込んだ。

ウォルトは木が倒れてくるのではないかと身構えたが、木の幹に入った傷はそうとう薄かったらしく木が倒れる、ということとは起きなかった。

目の前で精霊の力を見せられたウォルトは、契約する以外の選択肢はないように思えた。事を終えた水黽がウォルトの肩に乗る。もう既にその場所が定位置のようだ。

「こんなことができます!」

自信満々な声を聞いて、二つ返事で、契約しよう、と返すウォルトであった。

水黽と契約を交わし、脇腹の傷を癒す為に全力を尽くしていたウォルトは七日程で傷が塞がったのを見て、異形の力が漏れていないか心配になった。異形の力をそのまま使っていれば一瞬で癒えてゆくので、封印が完全に壊れたわけではないにしても、一部壊れてしまっているのではないかと思ったからだ。

そのことを剣に言つと、

「そのようなことは起きておらぬぞ。それは多分、あの金色の獣の力だと思つが」

と、いう返事がきた。その回復力の正体は分からなかった。

ウォルトは、しかし本当にあの金色の獣、オサキには世話になつたな、としみじみ思いながら自分の身体に異常が無いかを確かめる。類の傷もすっかり癒えているし、左肩の傷も問題なさそうだ。

やっと完治したのだと、喜びが沸きあがってくる。異形の力を使っていたときにはそんな感動はなかった。自分が人に近付いていつてる気がして一人嬉しそうな顔を浮かべた。

ウォルトは嬉しそうな表情を浮かべていたのだが、一匹の獣の気配がその表情をかき消した。

その獣の気配は、山犬どころのものではなかった。もっと強い何かの気配がしたのだ。

これまで感じたことのない強者の気配にウォルトは身震いした。当然、力を試すことができる、という武者震いの類ではない。こういう気配を感じることが出来るようになったんだな。と冷静に關心する自分が、その気配に身震いしている自分を笑っている気がした。

だんだんと近付いてくる気配に剣を構えてその正体が現れるのを待つ。近づくにつれ高まっていく緊張感と戦いながらじつと見つめる木々の隙間に、その気配の正体を見た。

木から木へ動くその獣の姿を見ることができたのは一瞬だったが、ウォルトの二倍ほどの体長であったこと、黒い毛で覆われていたことなどは確認できた。

そのまま通り過ぎていった黒い獣に安堵したウォルトは、向こうはまだこちらに気付いてなかったのか、良かった、と思った。

しかし、ウォルトの期待を裏切つて、その黒い獣は一旦通り過ぎたはずが、何を思ったかこちらに引き返してきたのだ。唸り声を上げながら接近する黒い獣に、不意打ちの一撃を与えようと剣を構える。完全に姿を現したその黒い獣に大きく剣を振り上げ、斬りかかった。不意を衝かれた黒い獣は、反応することが出来ずにその斬撃をまともに受けた。片方の腕を切り落とされたその黒い獣は立ち上がった雄たけびを上げる。ビリビリと空気が震える。

その雄たけびを上げる獣の胸元を良く見れば、黒い毛の中で一際目立つ白い毛が横一線に存在していて、周りの毛の黒さを惹き立てている。

胴体から力強く伸びている腕にも、白い毛が上腕部から手にかけて生えていた。片方の腕は半分あたりから切り落とされていてその断面からは赤黒い血が流れ出ていた。

その黒い獣の迫力は異形にも劣らないものがある。こちらを見て激昂する獣が動き出す。一発でももらえば死ぬ、という勢いの迫力に負けられないように奥歯を強く噛んで獣の動きを見極める。

黒い獣は切り落とされていない方の腕を振り上げる。鋭く光る大きな爪がその姿を見せ、ウォルトに襲い掛かった。避けるか受けるか、瞬時に判断したウォルトはその場から後ろに跳んだ。

多少の余裕を持ってその一撃を避けることが出来たウォルトは、その場で反撃に移った。

その太い足を狙い剣を振る。その足を奪うことが出来ればウォルトの勝ちが決まったようなものだが、そううまくはいかず、表面をかすっただけにとどまった。

しかし、それだけでも十分に効果があることをウォルトは知っていた。

この盟約者なら、かすっただけでもその瞬間に多少の血を吸うことができ、それを蓄積すれば有利に戦闘が進められる。この赤い剣となら、どんな獣にも負ける気がしないと思った。

その強者の気配に気圧されていたウォルトの姿はもうどこにもなか

った。高揚した気分のまま黒い獣を攻め立てる。黒い獣の一撃を大きく避けてその隙を逃さずに斬り込んだ。黒い獣から流れる血と、それを吸いさらに赤くなる剣に、ウォルトの気分は最高潮に達した。

黒い獣の振り下ろした腕と同じ瞬間に攻撃を仕掛ける。今の自分ならこの大きく強い気配を放つ獣と対等に打ち合えると思ったのだ。しかし、それは間違いだった。高潮した気分が判断を鈍らせる。自分の持つ実力を誇張して認識させていたのだ。

地面にしたたかに打ち付けられてしまう。しかし、黒い獣も血を失いすぎたのかどこか動きが鈍い。

しかし、その一撃をまともに受ければ異形の力を使わねば生きられない程の傷を負ってしまうだろう。

ウォルトは、悲鳴を上げる体を無視して立ち上がる。剣を構えて隙を窺っていると、以前に一度だけ見たことのある水の刃が黒い獣の足を襲う。立ち上がったいた黒い獣はたまらず体勢を崩した。

この隙を見逃すウォルトではなかった。大きく斜めに斬り込んで、剣を振り切った。

致命傷を受けた黒い獣は、弱い雄たけびを上げて動かなくなった。先程の力強い雄たけびと比べて、正反対のようなものだった。

「ありがとな、水黽。おかげで助かったよ」

「い、いえいえ……。あの時のウォルトさん、ちょっと怖かったです」

肩に飛び乗ってきた水黽に話しかけて、返ってきた言葉に自省した。確かに、あの時の自分の判断力はどこがおかしかった気がする。

「ところで今までどこにいたの？」

「く、黒い獣が……こ、怖くて……。でも、ウォルトさんの様子が、お、おかしくなって……」

肩でプルプルと震えだす水黽を優しく撫でると、徐々にその震えが収まっていく。

ウォルトは、水黽の震えが完全に収まったのを確認して撫でていた手を止めた。

ウォルトが、判断力を乱した原因を自分の中に探せば、簡単に答えが出た。実力の成長に精神の成長が追いついていないのだ。どんどん強くなる自分の実力に簡単に酔ってしまった甘い精神を鍛える必要がある、と結論付けたウォルトは、目の前で死んでいる黒い獣に黙祷を捧げた。

自分に教訓を与えた黒い獣を目の前にした青年の肩には青い獣がちょこんと座っていた。

### 13話 剣と方針

異形の住む山の麓では、一人の青年と一本の剣と一匹の獣が今後のことについて話し合っている最中だった。その中でも、黒い獣が教えてくれた問題は大きいものだった。

「我からは何も言えぬ。血塗れた剣が血に酔うな、などと申せば笑い種であろう。しかし、主が血に酔うことを善しとしないのであれば、助言ぐらいは致そう」

剣はそう言ったきり黙りこんでウォルトの言葉を待つようだ。剣の言葉が途切れると、次は水黽が言葉を発した。この水黽はまだ水刃の精霊として未熟らしく、ウォルトと契約することで精霊として成長するつもりらしい。

「私は、折角契約してくださったウォルトさんが本能が求めるまま戦う、まるで獣のような人にはなって欲しくありません……」

蚊の鳴くような声でも、きちんと自分の意見を言う水黽に急かされた気がしたウォルトは、自分の考えをまとめていく。

異形の血が混じって人ではなくなっただけでも、そこから異形の力と共存することを拒んで、やっと成し遂げたのだ。そうして、人に近付いたと思っていたのに、今度は人として自分の身も省みずに血に酔うまま戦っていては、そのうち封印している異形の力も使いながら戦うようになってしまうだろう。

あの封印は自分の意志で簡単に破れる物だと剣も言っていた。そうしたら、今度こそ完全に異形に堕ちてしまうかもしれないのだ。そ

れは、ウォルトとしてはとても嫌な事だった。絶対に受け入れたくない。  
その為には、血に酔わず、自分を見失わないように戦うことが出来るようにならなければならない。

精神と実力の釣り合いを取る為にも、精神の成長は不可欠なものだ。

やっと自分の考えをまとめることが出来たウォルトは口をひらいた。  
た。

「やっと異形の力を封印して人に近付くことができたのに、今さら異形に堕ちてしまうようなことはしたくない」

その言葉に、ウォルトの肩に乗っていた水鼬は首をかしげたが、剣の方は満足そうな声を出した。

「精神を成長させるのは、経験だ。様々な出会いや体験が精神を成長させてくれるはずだ。今も成長しているだろう。しかし、精神の成長には時間がかかる。異形の力を借りて瞬間的に伸びた実力の成長に追いつくものではない。主の精神を豊かにするためにも、我はこの島を旅することを勧めたい」

ウォルトは剣の言うことに頷きながら、流してしまっていた山の頂上にたどり着いた後どうするのか、ということをはっきりと決めたのであった。

異形の住む山の頂上を目指す、という目標を最初に掲げたウォルト

ト達はとうとう山の周りを回ることを止めて、その頂上に向かって歩を進めることに決めた。

山を登るということは、必然的に異形と戦うことになる。ウォルトは、このまま異形と戦うことに不安を感じていたが、剣と水黽がいれば大丈夫だ、とも思っていた。村から追放されたウォルトが頼れるのは、この剣と水黽だけであった。そのなかで、未熟な精神を補ってくれる剣や精霊である水黽のことを心底信頼していた。彼らなら自分のことを見捨てない、と無意識のうちに安心していたのだ。

具体的な山の方向を水黽が木に登って確認してくれている。その報告を待ちつつ、剣と話す。

「今の主なら、下位の異形なら何とか勝てるだろう。しかし、自分の精神を律しながらとなると話は別だ。結果の分からぬ戦いになるはずだ。もし負傷したら麓に引き返すのが良策である。身体に異常がなくなるとも、精神的疲労を感じたならば戦わぬことだな」

「分かった。その通りにする」

「主の実力は確かに成長した。敗北を考えて心配などはしなくとも良い。余計なことに集中力を使わず、異形との戦いだけに意識を向けるのが良かろう」

剣と語り合うウォルトの肩に、木から降りてきた水黽が飛び移る。飛び乗ってきた水黽が少し震えているのを感じて、ウォルトはその震える身体を撫でてあげる。ウォルトに撫でられながら、水黽は自分が見たことを報告する。

「や、山はあっちの方です。でも、異形の気配がします……」

そのカマの様な尾の先端が、山の方角を指しているのだろう。ウォルトは山の方角に目を向ける。  
その目には、これから待ち受けるであろう困難が映っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7076x/>

---

欠けたままの月

2011年10月28日11時06分発行